

早稲田大学高等学院
2024年度 一般入試



〈R06182061〉

注 意 事 項

- 1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
- 2 問題は2～10ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
- 4 記述解答用紙記入上の注意
- (1) 記述解答用紙の所定欄(2カ所)に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。

数字見本	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

- (2) 所定の欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- (3) 受験番号は右詰めで記入し、余白が生じる場合でも受験番号の前に「0」を記入しないこと。
- (4) 解答用紙は折り線のところから山折りにしてから解答すること。
- (5) 字数指定のある問いに答える場合は、句読点などの記号も字数に含めるものとする。
- (6) 字はすべて丁寧に書くこと。
- 5 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。
- 6 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離さないこと。
- 7 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。
- 8 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
- 9 この問題冊子は持ち帰ること。

メディア論では、「人の感覚がテクノロジーによって書き換えられていく」という考え方をすることがよくあります。新たなテクノロジーは、それが普及するにつれて、行動様式、感じ方や捉え方、ものの見方を具体的に変えていくのです。

技術が感性のあり方を左右していくのだとすれば、スマホを手にした私たちはどう変わってしまったのでしょうか。この変化によって失われたものにフォーカスしてみましよう。

常時接続の世界で失われたものの。いろいろな論者の見解を私なりに整理して総合するなら、それは二つの観点から説明できます。それは、〈孤立〉と〈孤独〉です。それぞれについて言い換えれば、他者から切り離されて何かに集中している状態と、自分自身と対話している状態のことです。

常時接続の世界の行動について立ち止まって考えればわかることですが、私たちは、反射的なコミュニケーションを積み重ねています。いろいろなものを保留しながら、短いテキストやアクションで表面的な返答を順次していく。

ここで失われているのが〈孤立〉です。何か一つのことに取り組み、それに集中するにはあまりに気が散っていて、いろいろなコミュニケーションや感覚刺激の多様性が、一つのことに没頭することを妨げてしまっています。ここで念頭に置かれている「〈孤立〉の喪失」は、マルチタスキングによる注意の分散¹のことであり、これは、メディア技術が可能にした「アテンションエコノミー（注意経済）」の一つの帰結でもあります。

アテンションエコノミーにおいては、コンテンツ、広告、製品、サービス、ウェブプラットフォーム、オンラインサロン、YouTube チャンネル、インフルエンサーなどのいずれも、どれくらいの人々がそれに注目し、クリック数や購入者数、登録者数、売上などがどれくらい具体的に動いているかという、数量的な動員こそが問題になります。

あらゆる人間やイベント、商品などがアテンション（＝注意）を奪うことに最適化しているこうした消費環境は、明らかに注意の分散に貢献していますが、別に企業や技術だけのせいでもありません。私たち自身が、日夜スマホを通じて注意を分散させる試みに喜んで参加していることを進んで認める必要があるでしょう。スマホを触りながらの対面コミュニケーションでは、相手の会話は薄く聞くだけ、小難しい内容は無視する、何か聞かれたら生返事、そんなやりとりが①の山でしょう。こんな環境で、「消化しきれなさ」「モヤモヤ」「難しさ」の類を抱えておくなんてやつられないと思えないはず^aです。

残念ながら、注意の分散によっておろそかになるのは、対面のコミュニケーションだけではなくありません。マルチタスク的に処理しているあらゆることが、同時並行している分だけおろそかになっています。漫画を読むことも、電話をすることも、音楽を聴くことも、誰かとテキストをやりとりすることも、全部です。

さらに、スマホを通じて注意を分散することに慣れた私たちは、スマホを使っていないときでさえ、気もそぞろで対面のやりとりをしているらしいのです。

いくつかの研究がシサ^aするところでは、スマホを触っていないなくても、そこにスマホがあるという事実が、対面の会話に影響を与えている可能性があります。具体的には、会話での共感²のレベルが下がり、話題がスマホに左右される恐れがあり、自他の感情や心理状態への注意が削がれてしまいかねません。

恐らくこのことの背景には、注意の分散があるのでしょう。一つのことに十分注意を向けて、それについてあれこれ考える習慣そのものが衰退しているのだとすれば、やはり〈孤立〉が重要になってきます。

いろいろな事柄や相手に注意が分散しているわけですから、対面での会話が作業するようにこなされてしまうのは当然です。反射的なコミュニケーションで自分を取り巻くことは、相手の人格や心理状態を想像しないようにと日夜練習を積み重ねているようなものです。

常時接続の世界では、〈孤立〉だけでなく〈孤独〉もまた失われつつあるという話でした。〈孤立〉は、注意を分散させず、一つのことに集中する力に関係するのに対して、〈孤独〉は、自分自身と対話する力に関わっています。

ただし、〈孤独〉といっても、これは「自分自身と過^cすこと」をそのまま指す言葉なので、否定的な含みがないことに留意する必要があります。そうはいっても、悪い印象を持ってしまう人も多いでしょう。その疑問を払拭^bするためにも、どうして〈孤独〉が必要なのかという問いに、ハンナ・アーレントという哲学者の想像力を借りて迫ってみたいと思います。

アーレントは、「一人であること」を三つの様式に分けています。それが、〈孤立〉、〈孤独〉、〈寂しさ〉です。

アーレントは、他の人とのつながりが断たれた状態を〈孤立〉と呼びました。言い換えると、〈孤立〉は、何らかのことを成しと[○]げるために必要な、誰にも邪魔されずにいる状態を指しています。創造的・生産的なことでなくても、何かに集中して取り組むためには誰かが介在してはなりません。例えば「何かを学んだり、一冊の書物を読んだりする」[○]ときなどに、「他の人の存在から守られていることが必要になる」ように。

要するに、何かに集中して取り組むために、一定程度以上求められるのが、この物理的な隔絶状態です。この意味で、〈孤立〉は、何かに集中的に注意を向けるための条件になっていることがわかります。

それに対して〈孤独〉は「沈黙の内に自らとともにあるという存在のあり方」だと説明されます。〈孤独〉にあるときの私たちは、心静かに自分自身と対話するように「思考」しているということです。〈孤独〉とは、私が自分自身と過ごしながら、「自分に起こるすべてのことについて、自らと対話する」という「思考」を実現するものなのです。

しかし、人から話しかけられたり、余計な刺激が入ったりすると、自己との対話（＝思考）は中断されてしまいます。この意味で〈孤立〉は、〈孤独〉とそれに伴う自己対話のための必要条件にはなりません。〈孤立〉抜きに〈孤独〉は得られないということです。

より興味深いのは、「一人であること」の三様式の残りの一つである〈寂しさ〉です。アーレントは、〈孤独〉と〈寂しさ〉を区別するとき、〈孤独〉が〈孤立〉を必要とするのに対して、〈寂しさ〉は、他の人々と一緒にいるときに最もはつきりあらわれてくると述べています。³

〈寂しさ〉は、いろいろな人に囲まれているはずなのに、自分はたった一人だと感じていて、そんな自分を抱えきれずに他者を **A** 的に求めてしまう状態です。どうにも不安で、仕事が虚しくて、友人や家族とうまくいかないのが苦しくて、誰にも理解されない感覚があつて、退屈を抱えきれなくて他者や刺激を求めてしまう。これに心当たりがない人は恐らくいませんよね。

実際、〈寂しさ〉は旧来的な共同体が崩壊した都市社会に生きる現代人に、宿業のようにのしかかるものだといふ[○]アーレントは考えていました。私たちはみな、どこにいてもアットホームな気持ちになれない余所者（故郷喪失者）のような心理になる素質を持つており、その気持ちを忘れるために、何かや誰かと一緒にいたいと望む寂しがり屋なのです。

スマホという新しいメディアは、〈寂しさ〉からくる「つながりたい」「退屈を埋めたい」などというニーズにうまく応答してくれます。スマホは、いつでもどこでも使えるだけでなく、スマホを含む様々な情報技術が、私たちのタスクを複数化し、並行処理を可能にしています。コミュニケーションも娯楽もその他の刺激も流し込み、自己対話を止めて感覚刺激の渦に巻き込んでくれるマルチタスキングは、つながりへの欲望も、退屈や不安も覆い隠してくれます。

しかし、〈寂しさ〉からくるマルチタスキングは、いろいろな刺激の断片を **②** 継ぎ早に与えるもので、一つ一つのタスクへの没頭がありません。そうすると、ふとした瞬間に立ち止まったとき、「あれは何だったんだ」と虚しくなったり、つながりの希薄さ（つながっていても一人ぼっち）を実感したりすることになります。

⁴ 常時接続が可能になったスマホ時代において、〈孤立〉は腐食し、それゆえに〈孤独〉も奪われる一方で、〈寂しさ〉が加速してしまうにもかかわらず、私たちはそうした存在の仕方の危うさに気づいていないように思えます。これまで論じてきた問題点に、⁵ スマホというメディアの特性を重ねると、〈寂しさ〉という問題が前景化してくるということです。

私たちは自分の生き方を見つめ直すときに、自分と対話し、思考することが必要です。いつでも、たまには〈孤独〉を確保する必要があります。しかし、現代においてそれが困難になっていることも確かです。

現代では、様々なテクノロジーやサービスによって体験が効率化されています。様々な時短の方法があり、いずれも生活の重要な部分を占めているでしょう。

こうした消費環境の変化は、空いた時間を私たちが有効に活用することを前提としていますが、そうした発想自体に問題が含まれています。実際に、私たちは浮いた時間を〈孤独〉につながるものとして用いず、別の様々なマルチタスクで埋めてばかりいるでしょう。景色を見たり、ただ周囲の音を聴いていたりするようなダウンタイムを、スマホを手にした私たちは失ってしまいました。スマホを手にとるときには、様々な細切れのタスクを反射的に追いかけてしまっています。

「マルチタスクじゃなくて、ずっとSNS（あるいは動画）に没頭しているとき、私は孤独を感じる」などと反論し

たくなるかもしれません。しかし、そもそも本書の〈孤独〉概念は、**B** をもたらすものとして定義されており、SNSや動画に浸りきることは、**B** に必要な注意を分散してしまいかねず、〈孤独〉からほど遠いのではないのでしょうか。反論の文章にある「孤独」は、むしろアーレントの言う〈寂しさ〉を指しているように思えます。

（谷川嘉浩『スマホ時代の哲学』より・一部改）

語注

*ダウンタイム リラックスでできる時間。

問一 傍線部 a、c のカタカナを漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えよ。

問二 空欄①、②に入る漢字一字をそれぞれ答えよ。

問三 傍線部 1「注意の分散」に関する説明として適切でないものを次の中から一つ選び、その記号を答えよ。

- ア 注意の分散を防ぐには、物理的な隔絶状態が必要である。
- イ 注意の分散は現代社会の消費環境の成立に貢献している。
- ウ 注意の分散のために、対話では難しい内容が避けられる。
- エ 注意の分散は、人が〈孤独〉になることを確実に妨げる。
- オ 注意の分散はそこにスマホがあるというだけで生じ得る。

問四 傍線部 2「共感」とは具体的にはどういうことか。次のように答えるとき、その空欄に入る最も適切な言葉を本文中から十三字で抜き出して答えよ。

すること。

問五 傍線部 3 のように言えるのはなぜか。次のように答えるとき、その空欄に入る最も適切な言葉を本文中から八字で抜き出して答えよ。

他の人々との は、その人々と一緒にいるときに最も明瞭に感じられるから。

問六 空欄 A に入る最も適切な言葉を次の中から選び、その記号を答えよ。

- ア 依存 イ 逆説 ウ 同調 エ 衝動 オ 短絡

問七 傍線部 4 とあるが、「スマホ時代」に「〈寂しさ〉が加速してしまう」のはなぜか。その説明として適切でないものを次の中から一つ選び、その記号を答えよ。

- ア スマホ時代には、有意義な活動に没頭することで得られる充実感を抱きにくくなっているから。
- イ スマホ時代には、自己の内面を見つめて思考することで得られる精神的な充足感が失われているから。
- ウ スマホ時代には、不安や虚しさを直視して、それを克服していくという生き方が難しくなっているから。
- エ スマホ時代には、様々な技術によって生活が効率化され、することのない空いた時間が増えているから。
- オ スマホ時代には、他者と共感に基づいた関係を結びにくくなり、表面的な人間関係しか持てなくなっているから。

問八 傍線部 5「スマホというメディアの特性」に関連した説明として、本文の内容には合致しないものを次の中から

一つ選び、その記号を答えよ。

- ア スマホの常時接続によって、人々はつねに多様な感覚的刺激に巻き込まれていることになる。
イ スマホを持つことで、人々はいつもスマホを意識し、その意識から影響を受けることになる。
ウ スマホでマルチタスク的な処理をすると、人々はその一つ一つをおろそかにするようになる。
エ スマホを常用していると、人々は反射的なコミュニケーションを積み重ねていくようになる。
オ スマホの便利な機能に頼ると、人々は自分で考える習慣そのものを喪失していくことになる。

問九 二箇所ある空欄 Bに入る最も適切な言葉を本文中から五字以内で抜き出して答えよ。

問十 本文の内容と合致しないものを次の中から一つ選び、その記号を答えよ。

- ア 〈寂しさ〉にとらわれることは、現代の都市社会で暮らす人間にとって避けられない運命だと言える。
イ 常時接続などのテクノロジーの発達によって、人間の行動様式、感性などは必然的に変えられていく。
ウ アーレントの言う〈孤独〉には、自分自身の生き方を見つめ直すという肯定的な意味が含まれている。
エ スマホが普及した社会では、何もせずに静かに過ごすダウンタイムの価値が顧みられなくなっている。
オ 現代のアテンションエコノミーは、メディア技術によって注目度を数量化することで成り立っている。

「個人」という言葉はindividualの訳であり、これ以上分解できないという状態を意味するということは、現在ではかなり知られている。「これ以上分けられない」ということを人間のあり方の理解と結びつけているわけだが、これによって、他者とは異なる自分、ひとりひとり区別できる個人というところえ方が成り立つ。ここから、集団は、他とは区別できるそれぞれの「個人」の集まりであるとの考えが一般化してくる。全体は個（全体を成り立たせている要素）の集合体、自分の意志で自由に動く個人の集合体だと理解されていく。

しかし、わたしたちは、まず個として発生し、その後に相互に関係をつくっていったわけではない。最初から関係の中で存在し始めた。にもかかわらず、すでに溶け込んでいる関係の中から個を浮き立たせて分離し、その個を相互につないでいこうとする。なぜ、わざわざ集団からいったん切れた「個人」を想定し、その後にもう一度結びつけようとするのか。

わたしたち自身がこれ以上分解できない個体だと想定すると、そこで何が起こるか。それは、バラバラになった個人間の生存をかけた自由な競争である。しかも、この競争には、強制的に参加させられていく。その結果、当然、格差が生まれる。

つまり、これまでの共同体のあり方の中では得られなかった利益を得る者も登場するわけである。そのような経済活動では、個人の能力の有無が問われることで、個人間の処遇の違いが合理的に説明されていくことになる。個人は、富める者とそうでない者へと大きく分類されていく。

要するに、競争や格差の必然性を、自由の保障として人々が受け入れていく仕掛けとして「個人」が機能しているのではないか、ということである。そのような「個人」には、どんな特性が^aより定められているのか。これをわかりやすく解説してくれるものに、ロビンソン・クルーソーの物語がある。

「個人」であることの究極の状態は、たった一人で存在することだろう。つまり、無人島でのロビンソンの状態である（物語の後半で、他者と出会っていくことになるが）。彼は、無人島にいるにもかかわらず、³近代的労働を行うのである。

難破しながらもどうか助かったロビンソンは、船に引き返し小麦を見つける。初めてこの小説を読んだとき、わたしはこのつぎの彼の行動に感心してしまったことを覚えている。ロビンソンはその小麦すべてを食べてしまうのではなく、今後、食糧を安定的に確保（備蓄）するために、一部を蒔いて収穫するのである。同様に、見つけた山羊^{ヤギ}を家畜にし、数を増やしていく。作物を栽培し、家畜を飼い、野生動物からそれらを守るための囲いをつくり、夜中に見回りもし、大工仕事がうまくなり、土器もつくれば、^b暦と時計もつくる。彼は一年経つごとに、自分にどういうプラスとマイナスがあったかの損益計算をする。そして、余剰が出たことを神に感謝する。

資本家にとって、こんなに都合のいい人間はいない。労働と道徳とが見事に結びつけられている。合理的に計算し禁欲的に働いて財産を増やしていく「ロビンソンの人間」は、資本主義には絶対に欠かせない。資本家が労働者をより長く働かせ、生産量を増やしたい場合、賃金を増やすという方法がある。この場合、賃金が増え、それほど働かなくてもいままでも同様に必要が満たされるのなら、これまでより短い労働時間でいい、と考えられては困るのである。自分の必要を上回るものを生産することがなぜ必要なのか、という疑問は封印しておかなくてはならない。

無人島のロビンソンは、⁴近代が要請する「個人」の典型なのである。労働が社会生活に必要であると言うことと、人生の意味が労働にあり、労働の意味（喜び）が人生の生きがいになると言うことは、およそ別個の事態であるにもかかわらず、労働が道徳的規範として高い価値を得ていくことになったのである。ロビンソンは、絶海の孤島で貨幣経済とは切り離された自給自足をする人物であるというよりはむしろ、十分に資本主義の精神を体現する近代人なのである。

このように、せっかく人権保障の基礎としての「個人」が登場したにもかかわらず、その「個人」はゆったりと生活できず、ロビンソンのように常に将来を心配しながら生きなくてはならなかった。むしろ、「個人」であることによって生活が苦しくなることさえ引き受けなくてはならなかった。

「個人」として^cハクされるようになった人々は、契約し、勤勉に働き、所有する権利を得たのであるが、そのことと同時に、常に自分自身の能力が問われ、一定の行動が期待され、その意志も問われるようになった。ものごとを認識し、判断し、行動するのはあくまでも「個人」であり、その「個人」としての一連の振る舞いが他者から注目されるこ

となる。

このように自分の存在が責任の所在として理解されていけば、自分は他者とは明確に異なっているという意識をもたざるを得なくなる。こうして自意識過剰な個人が生み出され、それは「アイデンティティ」や「人格」という用語によって強められていく。他者とは異なる存在であること、つまり自分自身であることが要求されてくる。

近代的な「個人」は自分自身であることに重きを置く。もうこれ以上分解できない存在なのだから、単体のものではなくてはならない。「自分」という存在は、ひとつの特徴で説明されなければならない。しかも、不変の固定的な性質をもつと考えられねばならない。こうして、自分とは何者なのかという、いわば「自分探し」の問いが成立してくる。自意識やプライバシーの問題も出てくる。

今日、人権教育の枠組みで、自尊感情を高める実践が重視されることが多くなっている。それは自己肯定感と言い換えられることもある。自分自身であるという「個人」の発想自体が、尊厳の基礎であつたはずなのだが、それが揺らいでいるのである。だからこそ、あえて尊重したり、肯定したりする実践が必要になってしまふ。⁵「個人」であることは、精神的に非常に不安定であることがわかる。

このような個人心理の問題は、近代小説の大きなテーマともなり、わたしたちは、それを読むことでいろいろな問題のあり方におふれることができる。どんな小説が思い浮かぶかは、人それぞれに異なるだろうが、Aの短編「鼻」における和尚^{おしょう}の自尊心の問題は、わたしにとってはかなり印象的である。

高德の僧である禪智内供^{ぜんちないこん}の鼻は、上唇の上から顎^{あご}の下まで、細長い腸詰めのように下がっている。内供はこの鼻のことをとても気にしているのだが、それは、この鼻が食事をするときなどに不便だからというわけではない。つまり、気にしているのは、鼻の存在そのものではないのである。他者がこの鼻のことをどう見ているのか、どんな噂^{うわさ}をしているのかを気にしているのであり、また、自分がこの鼻のことを気にしていること自体が嘲笑の対象になることを気にしているのである。こうして、内供は実はこの鼻によって傷つけられる自尊心のために苦しんでいるのであり、この自尊心の毀損^{きそん}を回復しようといういろいろと試みるのである。自分を尊敬できない、肯定できない、そのままの姿で受け入れられないという、まさに近代的な悩みと闘っているのである。さまざまな集団的なつながりから解放され、自由で自足した「自分」そのものになったはずが、実際には、「自分」であることに悩むようになってしまったのである。

(池田賢市『学校で育むアナキズム』より・一部改)

問一 傍線部 a～c のカタカナを漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えよ。

問二 傍線部 1 について、「個人」をこのように捉えるようになったために、近代社会において何が生じたか。それが端的に述べられている部分を本文中から五字で抜き出して答えよ。

問三 傍線部 2 「ロビンソン・クルーソーの物語」の事例が表しているのはどのようなことか。次のように答えるとき、その空欄に入る最も適切な言葉を本文中から二十六字で探し、その始めの五字を答えよ。

近代化の過程で ということ。

問四 傍線部 3 はどのような労働のことか。次のように答えるとき、その空欄に入る最も適切な言葉を本文中から七字で抜き出して答えよ。

 に基づいて行われる労働。

問五 傍線部 4 「近代が要請する「個人」」の説明として本文の内容と合致しないものを次の中から一つ選び、その記号を答えよ。

- ア 自分の労働だけで必要なものを作り出す自立性の高い人間。
- イ 現在だけでなく将来も視野に入れて計画的に労働する人間。
- ウ 自らの労働で生じた収益と損失を抜き目なく計算する人間。
- エ 自分の労働によって余剰が生まれることに喜びを感じる人間。
- オ 有益なものを生み出すために労働の範囲を拡張し続ける人間。

問六 傍線部5について、精神的に不安定になる例として適切でないものを次の中から一つ選び、その記号を答えよ。

- ア 自分をそのままの姿で受容できなくなってしまうこと。
- イ 自分は何者なのかという問題に常に悩んでしまうこと。
- ウ 自分に対する他人の評価ばかりを気にしてしまうこと。
- エ 自分のプライバシーに対する侵害を過度に恐れること。
- オ 自分の本来のあり方を集団の中で見失ってしまうこと。

問七 空欄Aに当てはまる文学者を次の中から一つ選び、その記号を答えよ。

- ア 夏目漱石 イ 太宰治 ウ 志賀直哉 エ 芥川龍之介 オ 森鷗外

問八 傍線部6「禪智内供」はどのような人物の例として挙げられているか。本文中から八字で抜き出して答えよ。

問九 本文の内容と合致しないものを次の中から一つ選び、その記号を答えよ。

- ア 自尊心を傷つけられた禪智内供の苦しみは、集団から解放されて「個人」になった近代人の悩みを象徴的にあらわしているものと言える。
- イ 現代の教育で自尊心を高める実践が重視されているのは、近代社会の基礎であった「個人」の尊厳が軽視されるようになったためである。
- ウ 人間は最初から集団との関係の中で存在しており、人間を集団から切り離された「個人」ととらえることは、もともと実態に即していない。
- エ 近代社会で「個人」の自由が保障されたのは、近代社会特有の厳しさや不平等を人々に受け入れさせるための仕掛けであったと考えられる。
- オ 近代社会において、人々は自分のすべての行動に責任を負う「個人」と見なされ、自らを他者とは明確に異なる存在と意識するようになった。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。なお、この話の語り手は西行（平安末～鎌倉初期の歌人・僧侶）である。

待賢門院に、中納言の局と云ふ女房おはしましき。女院に後れ参らせられて後、様をかへ、小倉山のふもとに行ひすましておはし侍りとうけたまはり侍りしかば、長月のはじめのはじめつかた、かの御室にたどりたどりまかりにき。さて、かの局に對面申したりしはじめの言葉に、「うき世を出で侍りしはじめつかたは、女院の御事のつねは心にかかりて、あはれいかなる所にか、いまそかるらんなど悲しく覚え、誰々の人も恋しく覚え侍りしかど、いまはふつに思ひわすれて、Aばかりもなげく心の侍らぬなり。さすが、行ふ甲斐かひの侍ればや、憂き喜び心に忘れぬるなるべし。愚かなる女の心だにもしかなり。年久しく世をそむき、まことの道に思ひ立ちて、月日かさね給ふそこの御心のうち、いかにすみて侍らん。」とぞのたまはせし。ありがたかりける心かな。

（『撰集抄』より・一部改）

語注

*待賢門院 藤原璋子。鳥羽天皇の皇后。崇徳・後白河天皇の母。

*中納言の局 待賢門院に仕えた女性。

*女院 待賢門院のこと。

*様をかへ 頭髮をそって出家すること。

*小倉山 京都市右京区にある山。

問一 傍線部1「後れ参らせられて」とはどういう意味か。次の中から最も適切なものを選び、その記号を答えよ。

ア 年齢が若いこと イ 能力が劣ること ウ 出発が遅れること エ 先に死なれること

問二 傍線部2「長月」は何月の異名か。次の中から最も適切なものを選び、その記号を答えよ。

ア 七月 イ 八月 ウ 九月 エ 十月

問三 傍線部3「あはれ」、4「さすが」の意味として最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、その記号を答えよ。

3 あはれ

ア ああ イ おい ウ はい エ いや

4 さすが

ア ついに イ やはり ウ そつと エ すべて

問四 空欄Aに入る最も適切な言葉を次の中から選び、その記号を答えよ。

ア 雲 イ 露 ウ 霜 エ 霧

問五 傍線部5「しか」が指す内容として最も適切なものを次の中から選び、その記号を答えよ。

ア つらさも喜びも自然と忘れてしまったこと。

イ つらさや喜びをいつまでも忘れられないこと。

ウ 女院のことを思い出すことがなくなったこと。

エ 女院のことが心にかかって悲しく感じることに。

問六 傍線部6「まことの道」とは何のことか。次の中から最も適切なものを選び、その記号を答えよ。

ア 武道 イ 歌道 ウ 仏道 エ 神道

問七 傍線部 7 「そこ」は何を指すか。次の中から最も適切なものを選び、その記号を答えよ。

ア 待賢門院 イ 中納言の局 ウ 誰々の人 エ 語り手（西行）

問八 傍線部 8 「いかにすみて侍らん」の現代語訳として最も適切なものを次の中から選び、その記号を答えよ。

ア どうやったら澄むのでしょうか。 イ どこに住んでいることでしょうか。

ウ どんなに澄んでいることでしょうか。 エ どのように住んでいることでしょうか。

〔以下 余白〕

国語解答用紙

(注意)

受験番号・氏名は下の二つの欄に記入すること。
解答は右に指定された欄に書くこと。

< R 06182061 >

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

(注意) 所定の欄以外に受験番号・氏名
を記入した解答用紙は採点の対
象外となる場合がある。

問八	問七	問六	問四	問三	問一
				3	
				4	
			問五		問二

		二	
問九		問三	問一
問八		問四	問二
問五			
問六			
問七			

[illegible]折
り
線

< R 06182061 >

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

(注意) 所定の欄以外に受験番号・氏名
を記入した解答用紙は採点の対
象外となる場合がある。



採点欄
国語

問八	問七	問六	問四・五	問三	問一・二	三

問九	問八	問五・六・七	問四	問三	問二	問一

問十	問八・九	問六・七	問五	問四	問三	問二	問一